

iWork (Pages や Keynote) を PDF にする

1. 「ファイル」を選択

Pages ファイル 編集 挿入 フォーマット 配置 表示 共有 ウィンドウ ヘルプ

名称未設定 — 編集済み

表示 拡大/縮小 ページを追加 挿入 表 グラフ テキスト 図形 メディア コメント 共同制作 フォーマット 書類

絵のない絵本

ハンス・クリスチャン・アンデルセン Hans Christian Andersen

矢崎源九郎訳

ふしぎなことです！ わたしは、なにかに深く心を動かされているときには、まるで両手と舌とが、わたしのからだにしばりつけられているような気持になるのです。そしてそういうときには、心の中にいきいきと感じていることでも、それをそのまま絵にかくこともできなければ、言い表わすこともできないのです。しかし、それでもわたしは絵かきです。わたしの眼が、わたし自身にそう言い聞かせています。それに、わたしのスケッチや絵を見てくれた人たちは、みんながみんな、そう認めてくれているのです。

わたしは貧しい若者で、たいへんせまい小路の一つに住んでいます。といっても、光がさしてこないというようなことはありません。なにしろ、まわりの屋根ごしに、ずっと遠くの方まで見わたすことができるほど、高いところに住んでいるのですから。この町にきた、さいしょのころは、ひどくせまくるしい気がして、さびしい思いをしたものです。それもそのはず、森やみどりの丘のかわりに、地平線に見えるものといえば、ただ灰色の煙突ばかりなのですからね。おまけに、ここには、友だちひとりいるわけではありませんし、あいさつををかけてくれるような顔なじみもなかったのです。

ある晩のこと、わたしはたいへん悲しい気持で、窓のそばに立っていました。ふと、わたしは窓をあけて、外をながめました。ああ、そのとき、わたしは、どんなに喜んだかしれません！ そこには、わたしのよく知っている顔が、まるい、なつかしい顔が、遠い故郷からの、いちばん親しい友だちの顔が、見えたのです。それは月でした。なつかしい、むかしのままの月だったのです。あの故郷の、沼地のそばに生えている、ヤナギの木のあいだから、わたしを見おろしたときと、すこしもかわらない月だったのです。わたしは、自分の手にキスをして、月にむかって投げてやりました。すると、月はまっすぐわたしの部屋の中にさしこんできて、これから外に出かけるときには、まい晩、ちょっとわたしのところをのぞきこもうと、約束してくれました。そのときからというもの、月は、ちゃんとこの約束を守ってくれています。ただ残念なのは、月がわたしのところに、ほんのわずかの間しかいられない、ということです。でも、くるたびごとに、その前の晩か、その晩に見たことを、あれこれと話してくれるのでした。

「さあ、わたしの話すことを、絵におかきなさい」と、月は、はじめてたずねてきた晩に、言いました。「そうすれば、きっと、とてもきれいな絵本ができますよ」

そこでわたしは、いく晩もいく晩も、言われたとおりにやってみました。わたしは、わたしなりに、新しい「千一夜物語」を絵であらわすことができるかもしれません。でも、それでは、あまりに数が多すぎます。わたしがここに書きしるすものは、勝手に選ばされたものではなくて、わたしが選んだとお

テキスト

段落スタイル*

スタイル レイアウト 詳細

フォント

ヒラギノ明朝 ProN

W6 14 pt

B / U * 色

文字スタイル なし*

配置

左揃え 中央揃え 右揃え 両端揃え

下 * 上

間隔 28.8 pt

箇条書きとリスト なし

2. 「書き出す」を選択

The screenshot shows the Pages application window. The 'File' menu is open, and the '書き出す' (Export) option is highlighted with a red box. The document title is 'Hans Christian Andersen'. The right sidebar shows the 'Text' panel with 'Paragraph Style' settings.

メニュー: ファイル 編集 挿入 フォーマット 配置 表示 共有 ウィンドウ ヘルプ

名前未設定 — 編集済み

表示 125% 拡大/縮小

表 グラフ テキスト 図形 メディア コメント

共同制作 フォーマット 書類

段落スタイル*

スタイル レイアウト 詳細

フォント

ヒラギノ明朝 ProN

W6 14 pt

B / U * 色

文字スタイル なし*

配置

間隔 28.8 pt

箇条書きとリスト なし

絵

ハン

矢崎

ふし

わたし

いきい

ないの

ます。

のです

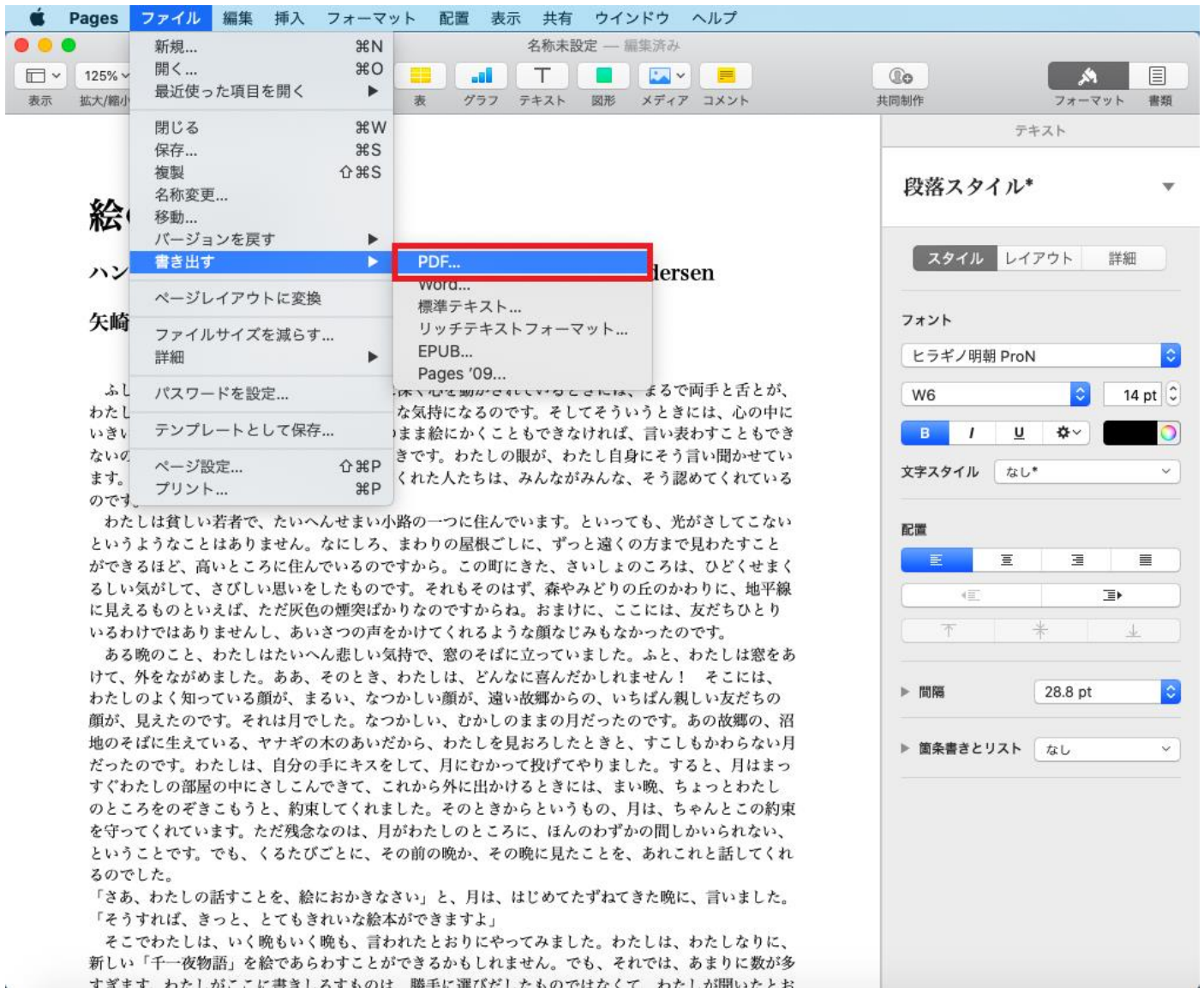
わたしは貧しい若者で、たいへんせまい小路の一つに住んでいます。といっても、光がさしてこないというようなことはありません。なにしろ、まわりの屋根ごしに、ずっと遠くの方まで見わたすことができるほど、高いところに住んでいるのですから。この町にきた、さいしょのころは、ひどくせまくるしい気がして、さびしい思いをしたものです。それもそのはず、森やみどりの丘のかわりに、地平線に見えるものといえば、ただ灰色の煙突ばかりなのですからね。おまけに、ここには、友だちひとりいるわけではありませんし、あいさつの声をかけてくれるような顔なじみもなかったのです。

ある晩のこと、わたしはたいへん悲しい気持で、窓のそばに立っていました。ふと、わたしは窓をあけて、外をながめました。ああ、そのとき、わたしは、どんなに喜んだかしれません！ そこには、わたしのよく知っている顔が、まるい、なつかしい顔が、遠い故郷からの、いちばん親しい友だちの顔が、見えたのです。それは月でした。なつかしい、むかしのままの月だったのです。あの故郷の、沼地のそばに生えている、ヤナギの木のあいだから、わたしを見おろしたときと、すこしもかわらない月だったのです。わたしは、自分の手にキスをして、月にむかって投げてやりました。すると、月はまっすぐわたしの部屋の中にさしこんできて、これから外に出かけるときには、まい晩、ちょっとわたしのところをのぞきこもうと、約束してくれました。そのときからというもの、月は、ちゃんとこの約束を守ってくれています。ただ残念なのは、月がわたしのところに、ほんのわずかの間しかいられない、ということです。でも、くるたびごとに、その前の晩か、その晩に見たことを、あれこれと話してくれるのでした。

「さあ、わたしの話すことを、絵におかきなさい」と、月は、はじめてたずねてきた晩に、言いました。「そうすれば、きっと、とてもきれいな絵本ができますよ」

そこでわたしは、いく晩もいく晩も、言われたとおりにやってみました。わたしは、わたしなりに、新しい「千一夜物語」を絵であらわすことができるかもしれません。でも、それでは、あまりに数が多すぎます。わたしがここに書きしるすものは、勝手に選びだしたものではなくて、わたしが聞いたとお

3 「PDF…」を選択

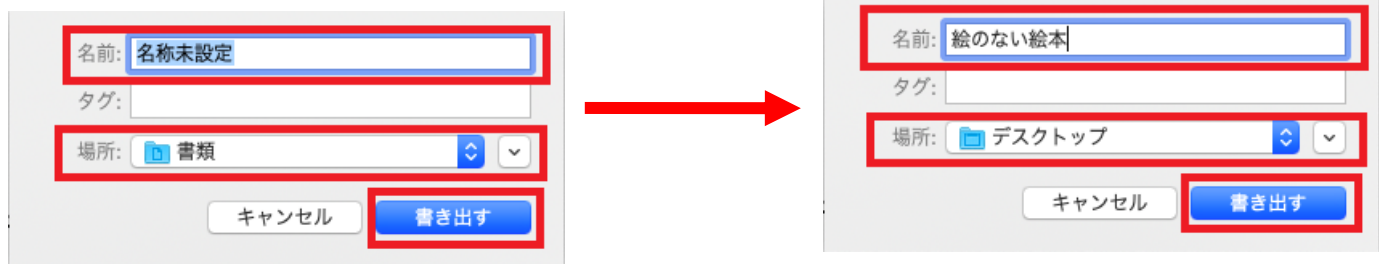


4. 「標準」を選択

※ファイル容量を小さくするため



5.任意のファイル名（名前）、保存場所（場所）を決め「書き出す」を押す



6.任意の保存先に保存され、ファイルが表示される。

